

マレーシア悲喜こもごも

信田 敏宏

2023年12月、マレーシアのヌグリ・スンビラン州とクダ州を訪問した。以下、現地調査について報告する。

一 ヌグリ・スンビラン州

2023年9月、調査村でお世話になっていた男性の訃報が伝えられた。亡くなってから100日目にあたる12月10日に埋葬儀礼がおこなわれるというので、6年ぶりに、ヌグリ・スンビラン州にあるオラン・アスリの村への訪問を決めた。

クアラルンプール国際空港から村への道は、新たに高速道路や広い道路ができていて、以前とは景色が一変していたが、村に近づくと、見慣れた風景が広がり、これまでどおりのオラン・アスリの村が私を迎えてくれた。



写真1 華人男性と結婚した女性の家(建築中) (2023年12月9日、筆者撮影)

村に到着して、まず目に飛び込んできたのが、新しく建てられた2階建ての立派な家屋であった(写真1)。オラン・アスリの村で2階建ての家はかなり珍しい。一軒は小学校の教師をしている女性、もう一軒は華人と結婚した女性の家で、二人とも村の元リーダーの娘たちである。

小学校教師の女性は、家族で日本への観光旅行を計画中のことであつた。彼女たちは、ここ数年家族でオーストラリアやベトナム、インドネシアなどに旅行をしているという。彼女たちの他にも海外旅行をした村人が複数いると聞いて驚いた。長期調査を実施した30年ほど前は、首都クアラルンプールに出かけることすら珍しかったので、時の流れと時代の変化を大いに感じる訪問初日となった。

埋葬儀礼当日、集まる村人やその雰囲気は以前と変わらず、昔に戻ったような居心地の良さに包まれた。ここでも目を見張ったのは、墓がずいぶん立派になっていたこと。マレーシア経済の発展にあやかり、最下層に位置するオラン・アスリの村も経済状況が上向きなのである。

男性は喘息を悪化させて亡くなったのだが、一度入院した時に辛い経験をしたようで、再入院を拒否し、悪化してしまったのだという。村で一番立派だったその男性の家は、現在、修繕もままならない状態で、リュウマチを患っている妻が娘と息子、そして居候中の孫娘の家族と暮らしていた。

娘の一人は高校の教師をしている。近くの町に一軒家を購入し、そこから仕事に通い、週末は村に帰ってきていた。独身の彼女は、55歳の定年後を見据えて、最近村に家を建てた。定年まで十数年も残っているが、物価の高騰を予想して家を建てたのだという。他にも、ペラ州で小学校の教師をしている男性が村に家を建てていた。やはり、親族のいる故郷の村は色々な意味で住み心地が良く、終の住処として選ばれるのであろう。

二 クダ州へ

現地調査4日目、マレー半島北部に位置するクダ州に向かった。クアラルンプールから高速鉄道で4時間の旅である。ここ数年でマレーシアには高速鉄道が導入され、それまでは空路か、もしくはバスで7~8時間かかっていた移動に、鉄道という選択肢が増えた(写真2)。

今回、ライドシェアサービス **Grab** を初めて利用したのだが、従来のタクシー利用に比べて

待ち時間が少なく、とても便利で快適であった。車のグレードや運転手、料金を事前にも選べる仕組みになっているので、かつてのように吹っ掛けられる心配もなく、安心して利用できる。



写真2 マレーシアの高速鉄道（2023年12月12日、筆者撮影）

クダ州の調査には3つの目的があった。1つは、ブジャンバレーにある考古遺跡の見学、2つ目は、障害児者施設の訪問、3つ目はケンシウ(Kensiu)というオラン・アスリのグループの村の訪問である。

ブジャンバレーには、マレーシア最古の王国の遺跡がある。古代より東西交易の要衝であったクダは、マレー半島を横断し、東海岸へと抜ける陸路があることで知られている。シュリーヴィジャヤ王国の時代には、クダには首都パレンバンに匹敵するほどの港があり、交易で栄えていた。パレンバンではなく、タイ南部のチャイヤーやクダ地域の方が王国の中心だったのでないかという説があるほどである。

これほど重要な場所であるにもかかわらず、ブジャンバレーは最近までマレーシアで大きく取り上げられてはこなかった。その理由の一つは、この遺跡が仏教ないしヒンドゥー教の遺跡

だからである。イスラームを国教としているマレーシア政府としては、この遺跡をあまりアピールしたくないのであろう。

ところが、最近になってこの遺跡が注目され始めている。今回の滞在中にテレビの特集番組で紹介されていたり、ブジャンバレーの考古学博物館もリニューアルされていた（写真 3、写真 4）。クダ州の観光の目玉として注目され、観光施設として整備されつつあるようだ。



写真 3 ブジャンバレー考古学博物館（2023 年 12 月 12 日、田中健志氏撮影）



写真4 ブジャンバレー考古学博物館の敷地にある考古遺跡（2023年12月12日、筆者撮影）

2つ目と3つ目の訪問の目的は、2023年10月下旬、マレーシアから届いた1通のメールが始まりであった。内容は、（東京都立大学大学院の大先輩である）故永田脩一先生（トロント大学名誉教授）の論文を、彼の調査地であったケンシウの村人がほしがっているのだが、手に入るだろうか、というものであった。メールの送信者はJICAの海外協力隊としてクダ州の障害児者支援に従事している日本人男性、田中健志氏。論文をコピーして送る旨を書いて返信したところ、田中氏からお礼のメールが届いた。

そこで、彼ならば知っているかとも思い、聞いたかったことを聞いてみたのである。私の娘には知的障害があることから、常々マレーシアにおける障害児者支援について関心を持っていたのだが、どこからどのように調べればよいのか考えあぐねていたところに、彼のような人とつながりができたのである。何か教えてもらえるかとも思い、クダ州の障害児者支援の状況について質問したところ、丁寧な説明が記されたメールが届いた。

田中氏によれば、JICAの障害者支援事業は、全体的に縮小傾向にあり、現在ではマレーシアが唯一の支援国と言ってもよい状態らしい。なぜクダ州かということ、マハティール元首相の故郷がクダ州だからである。マハティール首相時代に、日本とマレーシアの政治的な関係から

始まった事業とのことであった。それ以来、クダ州の障害者支援には JICA が深く関わり、現在に至っているのだという。

その後もメールでのやり取りを続け、結果、田中氏のもとを訪れることになったのである。

クダ州のスンガイ・プタニ駅に到着すると、田中氏と彼の事務所の所長（マレー人男性）が出迎えてくれた。彼らの事務所での大歓迎に戸惑いながらも、私は娘の話や訪問の趣旨を伝えた（写真 5）。その後、彼らの案内で、数日間にわたって多くの施設を見学させてもらった。学校に通えない障害児の受け入れ施設、学校卒業後の福祉施設、職業訓練の支援学校、幼児のセラピーを行っている民間施設、大学内にある青少年の支援施設などである。福祉の専門家ではない私に対して、どの施設の人たちもあたたかく迎えてくれ、軽食が用意されていたのがマレーシア風であった。1 日に何ヶ所か回る日には、何度も焼きそばなどの軽食を食べることとなり、お腹がはちきれそうであったが。



写真 5 田中氏が勤務する事務所でサインをする筆者(2023 年 12 月 12 日、田中健志氏提供)

オラン・アスリの村での滞在がほとんどであった私にとって、これらの施設訪問は、マレーシアの知らなかった一面を見ることができ、勉強になったと同時にこれまでの視野の狭さを実感する日々でもあった。

三 希望の園

忘れられない施設がある。「希望の園」という国立の入所施設である。親が育てられない障害のある子どもたち（14歳までの様々な民族の子どもたち）が、ボルネオ島のサバ州・サラワク州を含むマレーシア全土から送られてきて、そこに暮らしているという。15歳になると、障害の程度に応じて別の入所施設に移送される。場所はタイの国境近く、マレーシアの中心から見ると辺境の地にある。周囲にはアブラヤシのプランテーションしかなく、隣接する刑務所には麻薬や売春などの罪を犯した女性たちが収監されていた。

マレー人の施設長によれば、予算が削減され、人員の確保が難しく、子供達が亡くなった場合の葬式や埋葬費用にも困っているとのことであった。そうはいうものの、私たちの歓迎用の軽食は準備されていたのだが。

篤志家のマレー人女性の同行のおかげで、私たちは特別に施設内を見学できた。写真やビデオ撮影は禁止とのことだったが、篤志家の女性は自身の SNS のために写真や動画をとっていたので、私もどさくさにまぎれて撮影した。

まずは男子寮に案内された。部屋の扉が鉄格子になっていて、鍵がかかっていた。部屋にはベッドはなく、小中学生くらいの男の子たちが何人か寝転んだり、歩きまわったりしていた。部屋の奥をのぞくと、独房のような小部屋があり、裸のインド系の青年がいた。暴れる性質があり、家族が面倒を見られないという理由で、最近入所してきたのだという。

次に案内された部屋には、いくつかの小さな柵付きのベッドがあり、その中で幼児たちが寝たり、立ち上がったりしていた。話しかけると反応がある子もいた。ベッドから降りて歩いている小さな子に話しかけると、嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

この施設で働く JICA のシニアボランティアの男性によれば、食事は小さい時はミルクのみ、おむつはつけっぱなしで、トイレの介助はしないとのことだった。シャワーはシャワー室に何人かの子供を入れてホースで水をかけるだけだという。スタッフは 2 名の看護師だけなので、手が回らないというのが理由だった。彼がここに来た当初、暴れる子はベッドに手足を縛り付けられていたので、そのことを非難すると、紐にタオルが巻かれるようになったという。施設側は、「以前、パニックになり脱走した子が道路で轢かれて亡くなったので、それ以来身体拘束をしている」と彼に話したそうだ。

女子寮に案内された。男子は檻のような部屋であったが、6人ほどの女子はベッドに縛り付

けられていた。男子と同様に、頭はみな丸坊主であった。ここで、男性職員からきつい調子で写真の撮影を止められ、撮影はできなくなった。奥の小部屋には裸の女子が入れられていて、格子を揺さぶりながら唸り声をあげていた。

私たちはこうした状況に言葉を失い、呆然と見て回るしかできなかった。同行したマレー人の女性たちは、涙を流していた。

理学療法士でもある JICA のシニアボランティアの男性が小さな女の子にリハビリを施すというので、見せてもらった。その子の頭には針で縫った跡があった。親の虐待によって、脳を損傷し、手足に麻痺が残ってしまったため、リハビリを続けているという。

さまざまな経緯によって、子供たちはこの施設に送られてきたのだろうと推測できた。障害のない子供たちも一時的に入所していたので、その理由を聞くと、親が罪を犯したため、一時的に預かっていて、養子先などを待っているのだという。彼らは、職員を助けて、子供たちの面倒を見ていた。

言葉も教えてもらえず、ましてや勉強の時間などもなく（宗教の時間はあるようだが）、子供たちは半ば放置されるような状態で生活していた。彼らの親がこの施設を訪れることはないという。施設の名前が「希望の園」なだけに、子供たちが希望をもって生きていけるように少しでも状況が改善されていくことを願わずにはいられない。

四 ケンシウの村

ケンシウの村への訪問は、こうした施設訪問の1つとして実現した。スンガイ・プタニの町から内陸に向かって、車で1時間半ほどのところに、その村はあった。短時間の滞在だったので、村の全容まではわからないが、村の中を歩いて回った時には、定住化したオラン・アスリの村と変わりはない印象を受けた（写真6）。

訪問の目的は、永田先生の論文を手渡すことであった。論文とデータの入った USB を村長に手渡したところ、とても喜んでくれた。彼らは論文に掲載されている写真を見て、「姉が写っている」などと話していた。永田先生については、「彼は森の中でもどこにでも一緒に出かけて、村びとも仲が良かった」と、とても好意的な印象を持っていた。現在は、永田先生が調査した頃と違い、森の中ではなく定住地での暮らしになり、村びとのほとんどがイスラームへ改宗しているが、ケンシウの文化を継承していきたいとの思いが強いようで、そのためにも永田先

生が書き残した論文が必要なのだと話していた。また、土地の登記のためにも、自分たちが昔からここに住んでいたという証拠が必要らしく、その意味でも永田先生の論文は価値があるとのことであった。即席の贈呈式がおこなわれ、記念撮影をした後、私たちは村を後にしたのである。



写真6 ケンシウの村（2023年12月13日、筆者撮影）

この出来事はこれだけでは終わらなかった。同行したマレー人の所長が先述の篤志家のマレー人女性にこの訪問の様子を伝えたところ、その女性がいたく感動して、彼女の SNS にアップした。そうしたところ、ネットニュースが彼女の SNS を取り上げ、記事になった。また、その女性が知り合いの新聞記者に連絡し、私もその記者から電話インタビューを受けた。こうして、現地の新聞やネットニュースで、ケンシウの村の訪問の話題が取り上げられることになったのである。ネットニュースには、日本の研究者がオラン・アスリの村に貴重な文献資料を贈ったと書かれていた（写真7）。ネットニュースの広がりや反響は大きく、ヌグリ・スンビラン州の調査村の人たちからも「ネットニュースを見たよ」という知らせが複数届いた。後日談だが、永田先生の論文は、歴史的に貴重な文書としてケダ州にある国立大学の図書館に所蔵される計画が持ち上がり、2024年4月中旬、大学の副学長をはじめ関係者が村を訪問し、記念のセ

レモニーが開催されたとの嬉しい知らせを耳にした。



写真7 Siakap Keli(ネットニュース)の Facebook に掲載された記事。約 7000 の「いいね」がついた
(2023 年 12 月 16 日、Siakap Keli の Facebook より)

実は、永田先生の論文やフィールドノートなどのアーカイブ資料は、アメリカの大学のオラン・アスリ・アーカイブに保存されている。偶然、帰国後の 2024 年 1 月、そのアーカイブを管理している研究者から私に連絡があり、アーカイブ関連のテーマで、国際シンポジウムで話をしてほしいという依頼があった。2024 年 4 月、そのシンポジウムでは、2023 年 12 月の調査報告、特に永田先生の論文をめぐるエピソードについて話をした。

今回、村びとに渡した永田先生の論文のコピーはほんの一部であったが、その後、オラン・アスリ・アーカイブから提供してもらった儀礼の音源データを、田中氏を介してケンシウの村びとに届けることができた。今後も、機会があれば、永田先生が遺したデータをケンシウの人

びとの元へ届けたいと考えている。

五 移動について

現代のマレーシアの人びとは、民族を問わず、移動し続けている。働く場所は地元に限らず、海をまたいで全国各地に派遣される場合も珍しくはない。クダ州の障害者支援施設の訪問では、車での移動が片道 50 キロを越える日も少なくなかった。それを可能にしているのは、高速道路の整備や車の性能の向上である。障害のある人たちも同様に、移動範囲が広い。クダ州の支援学校の生徒がクアラルンプールのホテルの清掃の仕事に就いたり、クダ州以外の場所で研修を受けるなど、全国各地への就労はごく普通である。クダ州の北部にある幼児対象のケアセンターには、数十キロ離れた自宅から親が車で幼児の送迎をしているという。

移動好きのオラン・アスリの人たちも、あちこち出かけている。ヌグリ・スンビラン州の調査村の人たちは、今では州都スレンバンだけでなく、隣のスランゴール州やマラッカ州、そしてクアラルンプールまで、家族で日帰り旅行を楽しんでいる。格安航空を利用した海外旅行も計画しているようだ。ちなみに、クダ州で知り合った障害者支援施設関係者たちは、2024 年 1 月下旬、大阪と神奈川の障害者施設を見学するために自費で日本を訪れた。

その一方で、移動ができなくなった人びともいる。ケンシウの人びとは、現在、定められた定住地で集住して暮らしている。彼らの祖先は、狩猟採集活動をおこないながら、森の中を自由に移動して生活していた人びとなので、歴史的に言えば、何万年と続いていたケンシウの移動は止まってしまったと言える。別の言い方をすると、彼らの移動の自由は制限されているのである。「希望の園」に暮らす子供たちにいたっては、その移動に選択の余地はなく、現在は、建物の中の移動すらままならない。

プロジェクトのテーマの一つである「移動」について、当初はオラン・アスリの移動や古代の人びとの移動を思い描いていたが、今回の訪問を通して、「〇〇人が移動する、△△民族が移動する、A さんが移動する」といった個別具体的な現象として移動を捉えるのではなく、そもそも「ヒトは移動する」という視点で移動を捉えなおしてみたいと感じている。

また、人間は本来、戦争や災害などからの避難や、政治的、経済的、社会的な理由により、その場所に居られなくなって、移動したり、移住させられることが多かったのではないかと考えられるが、現代では、観光をはじめ、海外移住や国内移住など、移動の自由を享受する人間

の姿も見られる。ただし、現代においても、自由に移動できない人たちが多く存在していて、その意味を問うこともまた、移動研究にとって意義があるのではないかと感じている。

六 おわりに

久しぶりのマレーシア訪問、やはりインターネットや SNS だけでは捉えきれない現実を垣間見た気がした。「社会の変化」という一言では言い表せない様々な違和感や古き良き時代への懐かしさを感じるのは、私が歳をとったからなのかもしれない。調査村の人びとの絆が今もなお切れることなく存在していることに安堵する一方で、家族に恵まれない子どもたちが、経済発展を遂げるマレーシアの片隅で、誰にも気づかれずに生きていることもまた、この国の現実なのである。

若い頃は調査村やオラン・アスリへの興味関心がほぼ全てであったが、ふと気づくと、そうした関心は今、マレーシアの歴史や経済、政治や法律など、幅広く触手を伸ばしつつある。この歳で遅いと笑われるかもしれないが、ようやくそのような広い視野を持つことの意味に気づいている。同じ景色を見る目、同じ言葉を聞く耳も歳とともに変化していくということであろう。熱帯の地での調査研究は体力が勝負なので、歳を重ねるごとに厳しさが増すが、30 年来見てきたマレーシアの景色がより細やかに感じとれるのは、歳のおかげと思っている。

(のぶた・としひろ 国立民族学博物館)